

言心先生の 中国便り

賑やか過ぎる台頭

日本に来て二十数年間、一回だけ中国で春節(旧正月)を過ごした。春節は、一年中一番大切な祝日で、家族が最も集まる時である。しかし、その時期、帰らない理由がある。

旧正月の大晦日に、一晩中爆竹の音が、雷鳴のように響くため、普通の対話すらできない。数時間中断せずに続けために、夜は全然眠れない。騒音以上にもつといやな事は、火薬臭い空気である。今年の旧正月の空気中のPM2.5(微粒子)の濃度は、正常より数十倍も大きい。今、子供たちは、喜んで爆竹を楽しんでいるが、近いうちに、呼吸器官の病気を患ったとき、政府、社会、親はどんな責任を取れるのか? 騒音と汚染以外にも、正月の一ヶ月で、火事や眼が焼ける事故が多発する。考えてみると、正月の爆竹と花火の遊びは、利より害が遥かに大きいと思う。

日本も正月等の祭日はあるが、決まっている時間、決まっている場所で、静かにやる。やりたい人は、積極的に参加する。やりたくない人に迷惑をかけない。中国人は、祝日や祭りの時、大騒ぎすることが大好きである。他人に対して遠慮する気持ちが、足りないと思う。

中華帝王思想では、中国は世界の中心にあり、自国の文明は最高であり、周りの国々は、服従、朝貢すべきと考えられている。この二、三十年間での中国の政治、経済、軍事的な台頭は、余りにも賑やか、或いは大騒ぎである。領土問



題、環境破壊、軍事発展等の事は、周りの国々にとって、脅威であり迷惑な存在である事はいうまでもない。

前世紀60、70年代、日本も政治、経済、文化などの領域で、大きく発展し、アジアでリーダ的な国になった。今繰り返し見ると、その時の日本の台頭は、周りの国に迷惑をかけず、いわゆる静かな台頭だったと思う。

一九七四年十一月から、日中平和友好条約の予備交渉が、開始された。一九七八年八月、やっとこの条約が締結した。四年間、中国の要求する「反覇権」(旧ソ連の覇権主義を批判する)をめぐり交渉が難航していた。日本の立場は、友好条約が第三国を非難しないという事であった。結局、条約の中で、日本の主張は明文化された。

三五年の歳月が過ぎた今も当時の日本の、他の国を利用せず、他の国に利用されずという立場は、素晴らしいと思う。

日本が台頭していった経過と経験は、他の国にとって、学ぶ価値があるのではなからうか。